

蘇の西、洛は洛陽、現今河南洛陽道の治、秋霖、三日以上雨歇まざるを霖と謂ふ、時霖、時節の物を植うるなり、蟲思、「文苑英華」に、蟲鳴機杼休とあり、蟲鳴が起ると反對に機杼の鳴聲が休なれば、「文苑英華」の方を取る、京水、「太平寰宇記」に、京水は鄭州滎陽縣の西二十二里に在りとあり、金谷、「太平寰宇記」に、河南府河南縣に金谷有りとあり、晉の石崇の故居なり、

【大意】朝に周地の人と辭去し、暮に鄭地の人の家に投宿する、他郷には知己が絶無なれば、寂寞の情に勝へ得ず、天涯の孤客は宿舎の僮僕と親みを加ふるのみ、而して鄭州よりして宛陽と洛陽との方面を望むも見ることも能はず、秋日の霖雨は平陸が全く晦く、唯見る田父の草際さいに歸ると、郵童が雨中に咿咿する状を、而して舎の主人は東阜の上上に在りて、時節に應ずる穀類を植ゑて茅屋を繕る、既にして蟲聲が起る同時に機杼の鳴聲は休む、羣雀が啾啾と喧しきは禾黍の熟したるを争ひ啄むなり、明日は此を去つて京水を渡る、昨夜は金谷に宿を求めしなり、此を去つて何を言はんと欲するや、唯言ふ窮邊即ち邊部の地の役人と爲りて微祿の爲に身を徇ふなり、

【餘論】此の篇、全く淵明を學んで其の痕跡を留めざるもの、殊に孤客親僮僕、時稼遠茅屋の句、前人の未だ曾て道破せざるの語、右丞の面目彰彰たり、顧可久曰く、眞景眞意、人所不道、洵に然り、洵に然り、漁洋の「唐賢三昧集」之を收む、黃香石、田父の二句を評して寫景入微とあり、

渡河到清河作

河を渡り清河に到りて作る

汎舟大河裏積水窮天涯。  
舟を汎ぶ大河の裏、積水天涯を窮む、  
天波忽開拆羣邑千萬家。  
天波忽ち開拆し、羣邑千萬家、  
行復見城市宛然有桑麻。  
行くゆく復城市を見る、宛然桑麻あり、  
廻瞻舊鄉國森漫連雲霞。  
舊鄉國を廻瞻すれば、森漫として雲霞に連る、

【注解】積水、海の異稱なるも今は黄河を謂ふ、「荀子」に、積水成淵、蛟龍生焉とあり、開拆、拆は拆と同じ、ニヒラクシなり、ニサクルシなり、宛然、詩經秦風に、宛在ニ水中央、注に宛然坐見貌とあり、

【題義】黄河を渡りて、舟清河に到達せるときの作、清河は河南の河北道貝州清河郡なり、

【大意】舟を大河即ち黄河の裏に汎べて出帆すれば、森漫たる積水は天涯を窮める、而して天波が忽ち開拆たる處、所謂清河郡の城邑が千萬家あるを認む、上陸して行くゆく更に城市の有るを見る、其の處には井然として桑麻の林あるを見る、是に於て自分は舊鄉國を憶ひ出し、目を其の方へ廻瞻すれば、唯積水の森漫として雲霞に連るを見るのみなり、

【餘論】顧可久、此の篇を評して情景曠遠雄渾と、當れり、

苦熱

苦熱

赤日滿天地。火雲成山嶽。  
草木盡焦卷。川澤皆竭涸。  
輕紈覺衣重。密樹苦陰薄。  
莞簟不可近。絺綌再三濯。  
思出宇宙外。曠然在寥廓。  
長風萬里來。江海蕩煩濁。  
却顧身爲患。始知心未覺。  
忽入甘露門。宛然清涼樂。

赤日天地に滿ち、火雲山嶽を成す、  
草木盡く焦卷し、川澤皆竭涸す、  
輕紈も衣の重きを覺え、密樹陰の薄きを苦む、  
莞簟近くべからず、絺綌再三濯ふ、  
思は出づ宇宙の外、曠然として寥廓に在り、  
長風萬里より來り、江海煩濁を蕩す、  
却つて顧ふ身の患と爲るを、始めて知る心未だ覺らざるを、  
忽ち甘露門に入れば、宛然たり清涼の樂

【注解】火雲、隋の盧思道が「納涼賦」に、火雲赫而四舉とあり、焦卷、魏の應璩が岑文瑜に與ふる書に沙磧銷燬、草木焦卷とあり、輕紈、輕細なる熟絹なり、莞簟、「詩經小雅」に上莞下簟とあり、「キムシロ」と「マカメシロ」となり、絺綌、葛の精なるものを織ると曰ひ、織なるものを絺と曰ふ、寥廓、カラリと開けたる貌、「楚辭」に上寥廓而無天とあり、類師古曰く、寥廓天上寬廣之處と、長風、晉の陸機の詩に、長風萬里舉とあり、身爲患、「老子」第十三章に、吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身、吾有何患とあり、心未覺、覺は覺悟、迷惑の反對、佛教の通説なり、甘露門、玄妙の眞理を甘露門と謂ふ、「法華經」譬喻品に、能開甘露門、廣度

於一切とあり、清涼、佛教に、清涼世界あり、曾て煩濁無き國なり、

【大意】天地一面赤日が充滿せり、火の如きの雲が山嶽の形を成して現る、草木も木も盡く焦げ卷く、川も澤も水が竭き涸る、身體に著けて居る輕紈すら猶ほ重き感を覺え、鬱密たる林樹も猶ほ陰の薄きを苦しむ、莞簟は夏日近くべきものなるが、それすら近くこと能はず、絺綌は汗の爲め汚れるが故に一日に再三濯ふに至る、是に於てか我が思は此の苦熱の宇宙外に出て、曠然たる所の寥廓に入らざるを得ず、寥廓の中は長風が萬里より來りて、江海に於て煩濁を蕩盡する如くならん、却いて顧みるに此の如く炎熱に苦しむは、畢竟此の一身の爲に患ふるなり、心の置き處に依りて身の患と爲らざることを今まで覺らざりしなり、心の觀察の如何に頼つて忽ち甘露門に入れば、宛然として身は清涼國に在りて樂しむことを得るなり、

【餘論】此の篇、右丞得意の仄韻を以て成る、始めは苦熱の狀を敘し、終りは老子と佛道との身心二物を思と覺との二に歸し、結ぶに樂の字を以て題目の苦を奪ひ取る、余謂ふ此の如き詩は一句として見るべきにあらず、一篇構成上より其の價値を認むべきものなり、

納涼

納涼

喬木萬餘株。清流貫其中。

喬木萬餘株。清流貫其中。

前臨大川口。豁達來長風。

前は大川口に臨み、豁達として長風來る、

漣漪含白沙。素鮪如游空。

漣漪白沙を含み、素鮪空に遊ぶが如し、

偃臥盤石上。翻濤沃微躬。

偃臥す盤石の上、翻濤微躬に沃ぐ、

漱流復濯足。前對釣魚翁。

流に漱ぎ復足を濯ふ、前は釣魚の翁に對す、

貪餌凡幾許。徒思蓮葉東。

餌を貪る凡そ幾許ぞ、徒らに思ふ蓮葉の東、

【注解】豁達、魏の劉楨の詩に、華館寄流波、豁達來風涼とあり、漣漪、小波、細波なり、『詩經魏風』に、河水清且漣漪とあり、吾の左思が吳郡賦に、濯明月於漣漪とあり、素鮪、鮪は和語の「マダロ」なり、沃、波が我に沃ぐなり、微躬、魏の比約の詩に、復欲息微躬とあり、漱流、『晉書』隱逸傳に、漱流而濯其清、裴君而翰其類とあり、貪餌、『楚辭』に知貪餌而近死兮とあり、蓮葉東、漢の古詩に、魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西とあり、『抱朴子』に千歳の龜、五色具ばる、蓮葉の上に浮び、或は叢書の下に在り、時に白雲上に在るあり、盤ずるときは氣を食ふ、

【大意】雲を衝くの喬木が萬餘株ある、其の喬木の間に流る清き水あり、前面は大川の口頭に臨む、其の口頭よりは豁達として長風が來る、風を受ける少き處は小波が白沙を含んで太だ清し、素鱗を翻す鮪魚は水中を游泳する狀空に遊ぶが如し、自身は盤石の上に偃臥して見れば、翻濤が我が小さな躬に沃ぎ來る、又口を清流の邊にて漱ぎ、足を清流に濯へば、我が面前には一人の釣魚の翁あり、其の捕ふる魚の多からんことを貪ること幾許ぞや、余は徒らに蓮葉の東の故事を思ひ出すのみなり、

【餘論】此の篇を讀んで直ちに憶ひ起したるは、柳子厚の小邱西小石潭記の文章なり、潭中魚、可三百許頭、皆若空游無所依、日光下徹、影布石上、右丞と柳州は殆んど同時の人、互に大家剽竊する如きことあるべからず、偶然暗合して此に至りしものならん、

王右丞集卷四終

王右丞集卷五

古詩三十二首

濟上四賢詠 三首

崔錄事

濟上四賢の詠 三首

崔錄事

解印歸田里。賢哉此丈夫。  
少年曾任俠。晚節更爲儒。  
遯世東山下。因家滄海隅。  
已聞能狎鳥。余欲共乘桴。

印を解きて田里に歸る、賢なる哉此の丈夫、  
少年曾て任俠、晚節更に儒と爲る、  
世を遯る東山の下、因つて家す滄海の隅、  
已に聞く能く鳥を狎らすことを、余共に桴に乗らんと欲す、

【注解】 濟上、濟水の上の意ならん、濟水は源河南の濟源縣の西王屋山より出で、東南に流れ、豬流河と爲り以て黃河に入る、四賢、皆其の事歴を詳らかにせず、崔錄事、錄事は官名、晉始めて錄事參軍を置き、兼曹文薄を總録することを掌る、漢の官主簿と同じ、後各署に皆錄事の職あり、從七品、或は從九品とす、解印、錄事の官を辭するなり、賢哉、晉の張景陽の詩に、行人多隕涕、賢哉

古詩 濟上四賢詠三首・崔錄事

此丈夫とあり、任俠、「史記」に、季布者楚人也、爲氣任俠、有名於楚、如淳曰く、相與信爲任、同是非、爲任、所謂權行州里、力折公卿者也とあり、郭鳥、「列子」に、海上の人、鷗を好む者、每且海上に至る、鷗至るもの百數、其の父曰く、取りて來れ、吾之を玩ばん、明日、海上に至る、舞うて下らず、鷗の江海が詩に、物我但忘懷、可也以狎鷗鳥とあり、

【大意】錄事の官を罷めて田里に歸る、賢なるかな此の丈夫や、少年の時は任俠を以て處り、晩年に至りては儒行を以て處る、遜世の場處は是東山の下なり、東山の下は即ち滄海の隅に當る、已に人世の貪欲無ければ鳥も能く狎る、余も其の友と爲りて共に椀に乘りて濁世と別れんと欲す、

【餘論】顧可久此の篇を評して、正大古雅と曰ふ、余は此の詩を以て、韓文公の送楊少尹序と對讀せんと欲するものなり、

成文學

成文學

寶劍千金裝登君白玉堂。

寶劍千金の裝り、君が白玉堂に登る、

身爲平原客家有邯鄲娼。

身は平原の客と爲り、家に邯鄲の娼あり、

使氣公卿座論心游俠場。

氣を使す公卿の座、心を論ず游俠の場、

中年不得志謝病客游梁。

中年志を得ず、病を謝して梁に客游す、

【注解】文學、官名なり、「唐書百官志」に、東宮に文學三人あり、正六品下にして、經籍を分知し、文章を侍奉す、王府に文學一人あり、從六品上、典籍を掌校し、文章を侍從す、諸州文學に至りては、德宗の時改めて博士と稱す、德宗以前此の稱無しとあり、寶劍、劍の珍愛すべきものを謂ふ、「史記吳世家」季札と徐君の事に出づ、白玉堂、古詩に、黃金爲君門、白玉爲君堂とあり、平原、客、「史記」戰國趙の武靈王の子を勝と名く、平原に封ぜらる、故に平原君と號す、趙に相たり、賓客を好み、至る者數千人、邯鄲娼、邯鄲は趙の都、今日直隸大名道に屬す、「古辭」に、上有雙尊酒、作使邯鄲娼とあり、娼亦俠氣あるなり、使氣、「南史」に、傅幹負才使氣、凌侮人物とあり、客游梁、「史記」に、司馬相如、武騎常侍と爲る、其の好みにあらざるなり、會ま登帝辭賦を好まず、是の時梁の孝王來朝す、游説の士、齊人鄒陽、淮陰枚乘、吳莊忌夫子の徒を從ふ、相如見て之を悦び、病に因つて免ぜられ、梁に客游す、梁の孝王、諸生と同合せしむ。

【大意】寶劍に千金の裝を施し、以て我を用ふる君が白玉堂に登る、是に於て此の身は平原君の如き客を好む者の食客と爲る、然るに邯鄲は自然主義上下に瀾漫し、飲むに美酒あり、侍するに美娼あり、或は意氣を公卿の座に吐き、或は心骨を游俠の場に論じ、而かも遂に中年に至るまで眞の志は得る能はず、古の相如の如く此を去つて他に往くの身と爲る、

【餘論】此の篇は右丞の詩として最下に屬するもの、顧可久の評して、雄渾亦自有俠氣と曰ふは、右丞知るあらば一笑を發すべし、「文苑英華」「河嶽英靈」收むと雖も、何ぞ必ず名篇とせんや、

鄭霍二山人

鄭霍二山人

翩翩繁華子，多出金張門。  
幸有先人業，早蒙明主恩。  
童年且未學，肉食鶩華軒。  
豈乏中林士，無人獻至尊。  
鄭公老泉石，霍子安邱樊。  
賣藥不二價，著書盈萬言。  
息陰無惡木，飲水必清源。  
吾賤不及議，斯人竟誰論。

翩翩たる繁華の子、多く金張の門に出づ、  
幸に先人の業あり、早く明主の恩を蒙る、  
童年且未だ學ばず、肉食華軒を鶩す、  
豈中林の士に乏しからんや、人の至尊に獻する無し、  
鄭公は泉石に老い、霍子は邱樊に安んず、  
藥を賣りて價を二にせず、書を著はして萬言に盈つ、  
陰に息うて惡木無く、水を飲めば必ず清源、  
吾賤にして議するに及ばず、斯人竟に誰か論せん、

【注解】山人は隱者の稱、唐の肅宗、李泌に官を授けんと欲す、固辭し、願はくは客を以て從ひ、入つて國是を議し、出でて興廢に陪せん、衆指して曰く、黃を著する者は聖人、白を著する者は山人と、翩翩、『史記』に、平原君翩翩濁世之佳公子也とあり、自然主義の樂を致すの謂ひ、元來鳥鶩の輕疾の貌を謂ふなれば、自由我儘の意を含む、繁華子、晉の阮籍の詩に昔日繁華子と、呂延濟の注に、繁華喻人美盛如春花之繁とあり、要するに富貴の家の子弟と言ふことなり、金張、金氏と張氏の二家は帝室に親近して、其の寵貴外戚に比すと、『漢書』にあり、先人業、『國語』に、朝夕處事、猶恐忘先人之業とあり、明主、天子の尊稱、華軒、車の美

なるもの、梁の江淹の詩に、金張服貂冕、許史乘華軒とあり、中林士、林中士の側用なり、遷世の高士の稱、齊の王康居の詩に、今雖盛明世、能無中林士とあり、至尊、天子の尊稱、邱樊、『南史隱逸傳』に、若使遇見信之主、逢時來之運、豈其放情江海、取逸丘樊とあり、即ち一邱一樊、小さく且清き處の義なり、賣藥、『後漢書』に、韓伯休は常に藥を名山に採り、長安の市に賣り、口、價を二にせず、三十餘年、時に女子あり、藥を求む、伯休價を守りて移らず、女子怒つて曰く、公は是れ韓伯休ならずや、那ぞ價を二にせざるや、伯休歎じて曰く、我本名を避けんと欲す、今小女子、皆我有るを知る、何ぞ藥を用ふるを爲ん、乃ち逃れて劉峻山中に入る、惡木、晉の陸機の詩に、渴不飲盜泉水、熱不飲惡木陰とあり、

【大意】自由に享樂に耽る者は、皆金や張や富豪の家門より出づ、此等の徒は各の其の先人の功業に依つて、男爵であるの、子爵であるのとして天子の寵恩を蒙る、此等の徒は小學も中學も未だ其道を踏まざるに、口に味ふものは美食、身を運ぶものは華軒、然るに此等の徒以外に、立派なる高尚なる士無しと言ふべからず、惜い哉其の人あるも至尊に奏上する者無し、鄭公は其の人なるも、泉石即ち世外に老いと欲し、霍子も亦其の人なるも、邱樊是も即ち世外に安住する、昔年藥を賣りて名を逃れた人と同じく、其の著書は萬言にも盈たんと欲する學者なり、而して道を守ること正直、惡木の陰には息はず、盜泉の水は飲まず、息へば必ず良木の陰、飲めば必ず清泉の水、我は奏上したくも其の資格を有せず、然らば則ち斯の人は竟に誰と論せんとするや、

【餘論】此の篇は三首中に在りて、余は第一に推すものなり、翩翩以下六句、濁富家の子弟輩の世用を爲さざるを言ひ、七句以下、鄭公と霍子を言ふに、古の高隱を以て之に比し、其の賢者と俗物とを

軒輊し去る、右丞の才にあらずんば、此の如き妙句あるべからず、顧可久が高古俊偉と評するは、其れ真に當れり、其れ真に當れり、

偶然作六首

偶然の作六首

楚國有狂夫、茫然無心想。

楚國に狂夫あり、茫然として心想無し、

散髮不冠帶、行歌南陌上。

散髮して冠帶せず、行歌す南陌の上、

孔丘與之言、仁義莫能獎。

孔丘之と言ふ、仁義能く獎むるなし、

未嘗肯問天、何事須擊壤。

未だ嘗て肯て天に問はず、何事ぞ擊壤を須ひん、

復笑採薇人、胡爲乃長往。

復笑ふ採薇の人、胡爲ぞ乃ち長往する、

【注解】楚國、「高士傳」に、陸通、字は接輿は楚人なり、美性を好み躬耕以て食を爲す、楚昭王の時、通、楚政の常無きを見て、乃ち伴狂して仕へず、故に時人之を楚狂と謂ふ、散髮、頭髮を自然に任すなり、『後漢書袁安傳』に、終散髮絶世とあり、孔丘與之言、孔子、楚に過く、楚狂接輿、其の門に憐んで曰く、鳳兮鳳兮、何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也、天下有道、聖人成焉、天下無道、聖人生焉、孔子車より下り、之と言はんと欲す、趨りて之を避け、之と言ふを得ず、仁義莫能獎、孔子は一生仁義を獎勵する人、而かも趨りて言ふな欲せざる人、如何にして仁義を獎勵することを得んや、擊壤、堯の世、採薇、周の世、

【題義】偶然作は偶成と同じ、日常に思ひ居りしことにはあらず、思ひがけなくして出來たる詩の題

目を偶然作と稱するなり、

【大意】嘗て楚の國に一狂夫あり、其の人茫然として無心想の如きなり、其の風采を見れば常に散髮して冠帶を著けたること無し、時南陌の上に行歌して、孔丘と邂逅することあり、孔子は自分の主張する仁義の道を以て狂夫を獎勵せんと欲したるも、狂夫は孔子の如く事の判じ難きに至りて必ず天に問ふの態を嫌ふ、是の故に未だ嘗て天に問うたこと無し、又昔擊壤して堯の徳を稱歎したる民あるも、其れにも傲ふことはせず、復世の無道なるを憤りて山中に薇を採りし人の事をも笑ふ、笑うて曰ふ、彼は胡爲ぞ乃ち無益にして長往せしぞや、

【餘論】此の篇は、偶然作と題にはあるが、楚狂を詠する「詠史」とも見るべし、人は窮達の二道に於て心想を紛亂するもの多し、其の窮達を意に介せざるときは、心想の紛亂せらるること無し、此の篇、楚狂を借用して以て其の意を諷ふものなり、

田舍有老翁、垂白衡門裏。

田舍に老翁あり、白を垂る衡門の裏、

有時農事閒、斗酒呼鄰里。

時ありて農事閒なり、斗酒鄰里を呼ぶ、

喧聒茅簷下、或坐或復起。

喧聒す茅簷の下、或は坐し或は復起つ、

短褐不爲薄。園葵固足美。  
動則長子孫。不曾向城市。  
五帝與三王。古來稱天子。  
干戈將揖讓。畢竟何者是。  
得意苟爲樂。野田安足鄙。  
且當放懷去。行行沒餘齒。

短褐薄しと爲さず、園葵固に美とするに足る、  
動もすれば則ち子孫を長ず、曾て城市に向はず、  
五帝と三王と、古來天子と稱す、  
干戈と揖讓と、畢竟何者か是なる、  
得意苟くも樂と爲さば、野田安んぞ鄙むに足らん、  
且く當に放懷し去りて、行行餘齒を沒すべし、

【注解】 乘白、『漢書杜欽傳』に、誠哀老姐乘白と、顏師古の注に曰ふ、乘白者言白髮下垂也、斗酒、晉の陶淵明の詩に、斗酒  
兼比鄰とあり、短褐、『列子』に、衣則短褐、食則藜藿とあり、短褐は麤衣、貧者の服、園葵、陶淵明の詩に、好味止園葵とあり、  
葵は花卉として「アブヒ」なり、菜食として「ワサビ」なり、今の時も淵明の詩と共に「ワサビ」を言ふ、

【大意】 田舎に老翁あり、白髮を垂るるに至るまで衛門の裏に生活する、農事の閒暇ある際は、一斗  
の酒を置きて近鄰の者を呼び共に飲む、野人の常として言談喧嘩、茅簷の下名狀すべからず、坐する  
者もあり、起つ者もあり、身に纏ふ物は麤服なるも、麤服の感爲さず、口に食ふ物も亦麤菜なる  
も、麤菜の感爲さず、而して或は小人數の家もあるが、動もすれば子より孫、孫より玄孫なぞと  
多き者もある、老翁は一生を此に老いて、曾て繁華の都城に向ひしこと無し、彼の黃帝、顓頊、帝嚳、

堯、舜の五帝、夏禹、商湯、周文の三王など、古來より天子と民之を稱し來る、而かも或は干戈に訴  
へて位を取り、或は揖讓に依りて位を禪る、畢竟するに孰れか非にて孰れか是なる、各の其の得意を  
以て樂と爲すからには、野田は野田の樂あり、天子の樂と何ぞ異ならん、決して鄙とするに足らざる  
なり、要するにそんな事は放懷し去りて、今年來年と年の過ぐるに任せて餘年を没るべし。  
【餘論】 此の篇は田舎翁の日常生活を敘するに、都鄙と貴賤とを對照し、天子の貴も、田舎翁の賤  
も、衛門の鄙も、城市の都も、得意を以て樂とするからには、天子の得意も野人の得意も隔つる所無  
しと斷ず、願可久評して類陶真率と曰へるが、陶と并讀細觀すれば、詩の骨氣、陶を凌駕せるを覺  
ゆ、願本に田舎より城市に至る十句を一篇とし、五帝より餘齒に至る八句を一篇と爲したるもの如  
きは誤る、十八句一韻一篇の詩なり、

日夕見太行。沈吟未能去。  
問君何以然。世網嬰我故。  
小妹日成長。兄弟未有娶。  
家貧祿既薄。儲蓄非有素。

日夕太行を見る、沈吟未だ去ること能はず、  
問ふ君何を以て然る、世網我を嬰ぐが故に、  
小妹日に成長し、兄弟未だ娶ることあらず、  
家貧しうして祿既に薄く、儲蓄素あるにあらず、



幾廻欲奮飛。踟躕復相顧。

幾廻か奮飛せんと欲し、踟躕して復相顧みる。

孫登長嘯臺松竹有遺處。

孫登が長嘯臺、松竹遺處あり。

相去詎幾許。故人在中路。

相去ること詎ぞ幾許ぞ、故人中路に在り。

愛染日已薄。禪寂日已固。

愛染日に已に薄く、禪寂日に已に固し。

忽乎吾將行。寧俟歲云暮。

忽乎として吾將に行かんとす、寧ぞ歲云に暮るるを俟た

んや。

【注解】日夕、日と無く夕と無くと使用するあり、又日の夕と使用するあり、今の句は日と無く、夕と無くと解すべし、太行、「太平寰宇記」に、太行山は懷州修武縣の北三十二里に在り、案するに太行は一名、五行山と曰ふ、河南の河北道、山西の冀寧道、及び直隸の界に連亘し、山、百を以て數ふ、地に隨つて名を異にす、實は皆太行なり、沈吟、「後漢書曹爽傳」に、晝夜研精、沈吟專思とあり、又「後漢書陳寔傳」に、節得書、沈吟十餘日とあり、遲疑して決せざるを言ふ、奮飛、「詩經」に、解言思之、不能奮飛とあり、毛萇曰く鳥の翼を奮つて飛び去るが如きなり、長嘯臺、「晉書」に、阮籍嘗て蘇門山に於て孫登に遇ひ、與に終古及び棲神導氣の術を論ず、登皆應ぜず、籍因つて長嘯して退き、半嶺に至りて聞く、聲ありて鸞鳳の音、山谷に響くが如きを、乃ち登が長嘯せるなり、「太平寰宇記」に、懷州修武縣に天門山あり、今之を百家巖と謂ふ、巖下、百家を容るべし、因つて名く、劉伶が醒酒臺、孫登が長嘯臺あり、愛染、佛典に散在する語、人間の欲境に於て、愛染するを言ふ、禪寂、心を外界の爲め動かされず、我が身を養ひ得るを謂ふ、忽乎、「楚辭」に、懷信怫鬱、忽乎吾將行兮とあり、歲暮、古詩に漂漂歲暮とあり。

【大意】日中にも夕陽にも太行山を望見するも、沈吟して決然として此を去る能はず、若し人が君何を以ての故に然るやと問はば、我は答へん世網が我を嬰ぐが故にと、小妹が日に成長すれば、是教誨

せざるを得ず、兄弟が未だ妻を迎へず、是も迎へざるを得ず、家は貧にして俸祿は薄く、然りと云うて儲蓄の餘財平素有るにあらず、乃ち總てを抛擲して幾廻か奮飛せんと欲したるも、踟躕うて復前後を顧みる、而かも冥想して浮び出るは孫登が長嘯臺なり、其の處には松竹が遺跡として猶在るあり、我が今の住處と相距ること遠からず、我が故人は其の中路に在り、其の人は世網と愛染すること日に已に薄く、反對に禪寂の清修は日に已に固し、是に於てか我も亦忽乎として一刻も早く行かんと欲す、夏の晩、秋の末なぞと云ふことを俟たんや。

【餘論】此の篇、寄託する所ありて詠せしものか、又心情を發露せしものか、判斷すべからずと雖も、右丞が一生を通じての蹤より之を察すれば、心情を發露せしものなること疑ふべからず、但魏晉間の詩多くは仙道に託し、梵典に託するもの少なし、「遊仙詩」の多きにても知るべし、然るに右丞は仙に託するより、佛典に託するもの多きは、是れ晉代の名家中、特に靈運より得來るものなり、我邦の廣瀬淡窓なども、右丞の詩は淵明より來るの點を知りて、靈運より得來る點を知らず、淵明は儒としての方面のみ、靈運は仙佛を兼ね、余は謂ふ右丞の詩は靈運に屬すべきものと、淵明に屬すべきものと二方面より觀察するの要ありと、此の詩中に愛染、禪寂の文字あり、是れ靈運に於て見る、淵明に於て曾て見ざるの文字なり、是に於て乎亦謂ふ、右丞は仙梵の玄趣、晉宋の逸趣を一爐に收め鍛鍊して出し、以て無上妙諦を示すものと。

陶潛任天真其性頗耽酒

陶潛天真に任す、其の性頗く酒に耽る、

自從棄官來家貧不能有

官を棄てしより來家貧しうして有る能はず、

九月九日時菊花空滿手

九月九日の時、菊花空しく手に滿つ、

中心竊自思倘有人送否

中心竊かに自ら思ふ、倘し人の送る有るや否や、

白衣攜壺觴果來遺老叟

白衣壺觴を攜へ、果して來りて老叟に遺る、

且喜得斟酌安問升與斗

且喜ぶ斟酌することを得たるを、安んぞ升と斗とを問はん、

奮衣野田中今日嗟無負

衣を奮ふ野田の中、今日負くこと無きを嗟す、

兀傲迷東西簞笠不能守

兀傲東西に迷ふ、簞笠守ること能はず、

傾倒強行行酣歌歸五柳

傾倒強ひて行行、酣歌して五柳に歸る、

生事不曾問肯媿家中婦

生事曾問せず、肯て家中の婦に媿ぢんや、

【注解】陶潛、耽酒、棄官、九月、白衣、斟酌、以上の字解、余の陶淵明集注に説明せり、老叟は淵明を言ふ、叟は翁と同じ、老人を敬稱する語、兀傲、淵明の詩に、規規一何愚、兀傲差若頤とあり、兀立傲岸と成語して、其の人自己を高うして物と和せざるを謂ふ、傾倒、種種の義に用ふるが、傾跌即ち傾倒、文字通りの意、心折也と解するときは感佩の意を致すなり、今の義は傾跌即ち「カマブキツマツク」なり、家中婦、趙松谷曰ふ、淵明子に與ふる書に曰く、嘗て淵仲賢が妻の言に感ず、敗絮自ら棄す、何ぞ兒子に慚ぢん、

右丞が肯媿家中婦と謂ふは、正しく此の語を懸括するなり、婦を帯に作る本あるも、婦を以て勝れりとす、

【大意】陶潛の一生を通覽するに總て天真に任せたり、其の性頗く飲酒に耽る、彭澤の縣令を罷めてより以來、俸錢入らざれば家は貧、家貧なれば酒有ること能はず、九月九日の佳節に當り、菊花だけは我が園中の物、採りて以て手に滿つ、而して自ら思ふ、倘しや誰人か送惠せらるるあらんかと、果せるかな白衣の人壺觴を攜へて來り、此の老叟に遺らる、是に於て大に喜び、互に斟酌して飲む、酒の量が一升なるや一斗なるやは問ふを要せず、乃ち曾中の快を覺え、衣を奮ふ野田の中に、今日に於て我が平生に負く無きことを歎嗟す、兀傲の性東せんか西せんかに迷ふ、然りと云うて尋常農夫として簞笠を守ること能はず、傾倒しながら強ひて東西に行行す、遂に酣歌して五柳の居に歸去す、生計の事は曾て問訊せず、而して我は守る所別に在り、肯て家中の婦に媿づる所無し、

【餘論】此の篇は、楚國有狂夫と同じく、淵明を歌ふ所の詠史詩と見るべし、兀傲以下の四句二十字は、願可久、評して形容辭意と曰ふは當れり、醉意を形容するに依つて意義を爲す、然らざるときは、陶潛は兀傲なるも、決して迷ふ人にはあらず、簞笠も守り得る人なり、守る能はざるの人にあらず、

趙女彈箜篌復能邯鄲舞。  
 夫婿輕薄兒鬪雞事齊主。  
 黃金買歌笑用錢不復數。  
 許史相經過商門盈四牡。  
 客舍有儒生昂藏出鄒魯。  
 讀書三十年腰下無尺組。  
 被服聖人教一生自窮苦。

趙女箜篌を弾じ、復邯鄲の舞を能くす。  
 夫婿は輕薄兒、雞を鬪はして齊主に事ふ。  
 黃金歌笑を買ひ、錢を用ひて復數へず。  
 許史相經過し、商門四牡盈つ。  
 客舍に儒生あり、昂藏鄒魯に出づ。  
 書を讀むこと三十年、腰下尺組無し。  
 聖人の教を被服して、一生自ら窮苦す。

【注解】 箜篌、『釋名』に、「箜篌は此れ師延の作る所、師延の樂なり、後、桑間濮上の地に出づ、蓋し空國の候の存する所なり。師  
 涓、晉の平公の爲に鼓す、鄭衛、其の地を分ちて之を有す、遂に鄭衛の音と號す、之を淫樂と謂ふなり、』『舊唐書』に「唐高祖は漢の武帝、  
 樂人侯調をして作らしめ、以て太乙を祠る、或は云ふ侯調作る所、其の聲、坎坎、節に應ず、之を坎侯と謂ふ、應訛りて箜篌と爲る、  
 今遂かに是非を斷じ難し、其の形は琵琶の如く又瑟に似て小なり、七絃、撥を用つて之を彈す、邯鄲舞、邯鄲は即ち趙、趙は即ち鄭衛  
 の地、鄭衛の地は享樂の地、劉劭が「趙都賦」に、狄鞮妙音、邯鄲才舞とあり、輕薄兒、陳の沈約の詩に、洛陽繁華子、長安輕薄兒  
 とあり、鬪雞、『莊子』に紀渚子爲「王養鬪雞」とあり、王は即ち齊王なり、許史、許伯と史高となり、許は漢の宣帝が皇后の父、史は  
 宣帝が外家なり、四牡、『詩經』に四牡孔阜とあり、昂藏、氣宇軒昂を謂ふ、『北史』に、高昂、字は傲曹、幼にして壯氣あり、長ずる  
 に及んで傲儀、驕力人に過ぐ、其の父、其の昂藏傲曹を以ての故に之を字名すとあり、鄒魯、鄒は春秋の鄒國、戰國改めて鄒と爲す、

魯は周公の封地、而して孟子は鄒人、孔子は魯人、二邑は孔孟の化を以て皆文學興盛の地たり、今日の山東省一帶是なり、尺組、官  
 吏は腰に寸なり尺なりの組腰を帯びて以て其の位を見す、

【大意】 趙地の婦女輩は箜篌を弾じ、復邯鄲の舞を爲して其の日を送る、又其の夫婿輩を見れば皆輕薄  
 兒のみで、鬪雞などの技に巧妙にして以て齊主に事ふ、而して輕薄兒共は黄金の自由になるまま、淫  
 女の歌と、淫女の笑を買ふに是日も足らず、金の費用なぞ固より論せず、論せざるを以て數ふるの要  
 なし、上流に姻縁の多き徒輩が互に經過して、彼等の門前には馬車が常に充滿して居る、然るに客舍  
 に一儒生あり、意氣軒昂、彼等徒輩の腐敗を慨し、鄒魯の地に出で、聖人の書を読むこと三十年、而  
 かも腰下には判任官位の微官の帯ぶる尺組も無く、唯孔子の教、孟子の教と言ふことのみを被服し  
 て、一生を自から窮苦の中に終る、

【餘論】 此の篇、享樂に一生を終る徒と、窮苦に一生を終る者とを對比して、學人の憐むべきを言外  
 に表はす、蓋し此の状態はイツの世も同様ならんと思はる、今日見よ、或者は帝國ホテルのダンスの  
 會、或者は親子三人食ふ能はずして水に赴く、右丞は苦學する學人を憫み、余は食ふ能はずして死す  
 る者を憐む、

老來懶賦詩，唯有老相隨。

老來詩を賦するに懶し、唯老の相隨ふあり、

宿世謬詞客，前身應畫師。

宿世詩客に謬らる、前身應に畫師なるべし、

不能舍餘習，偶被世人知。

餘習を舍つること能はず、偶ま世人に知らる、

名字本皆是，此心還不知。

名字本皆是、此の心還知らず、

【注解】宿世、『法華經化城喻品』に、宿世因緣周の語あり、然るに『唐詩紀事』に當代に作る、當代にあらざれば、此の詩を解釋する能はず、前身、是宿世と同意味の語、餘習、『唐詩華嚴經』に、離一切煩惱心垢及其餘習とあり、殘餘習氣と成語す、不知、顯可久曰く、其我知之意、疊用知韻と、趙松谷曰く、疊用二字疑誤と、余は今案す、不知は不期の誤りたるや必せり、二字疊用の例無きにあらざるも、此の篇に於ては誤字なること疑ふべからず、

【大意】年老いてより以來詩を賦するに懶を感ず、然りと雖も老は今日より明日と隨ひ來る、而して自分は詞客を以て居らざるに當代の人は謬つて詞客の稱を爲す、蓋し自分の前生を考ふるに恐らくは畫師でありしならん、其の前生の餘習を今生も捨つる能はざるが故に、偶然にも世人の爲めに名を知らるるなり、其の詞客と謂ひ、畫師と謂ふ名字は本來是であらん、而かも其の是とする心も期したるにはあらず、偶然にも此に至りしものなり、

【餘論】此の篇の三四の二句は、古今有名と爲りしものにて、種種の詩話中に載せらる、而かも宿世を取つて、當代を取らず、宿世と前身と一意なることを知らば、宿世の非にして當代の是なることを知るなり、『唐詩紀事』に據れば、右丞自ら破墨の山水を畫き、此の詩を題せしもの如し、若し今日に於て此の畫あらば、千萬金を惜しまざる者多からん、

西施詠

西施の詠

艷色天下重，西施寧久微。

艷色天下重んず、西施寧ぞ久しく微ならんや、

朝爲越溪女，暮作吳宮妃。

朝に越溪の女と爲り、暮に吳宮の妃と作る、

賤日豈殊衆，貴來方悟稀。

賤日豈衆に殊ならんや、貴來方に稀なるを悟る、

邀人傳脂粉，不自著羅衣。

人を邀へて脂粉を傳し、自ら羅衣を著けず、

君寵益驕態，君憐無是非。

君寵驕態を益し、君憐是非無し、

當時浣紗伴，莫得同車歸。

當時浣紗の伴、車を同じうして歸るを得る莫し、

持謝鄰家子，效顰安可希。

持して謝す鄰家の子、顰に效ふも安んぞ希ふ可けんや、

【注解】西施、春秋、越の苧羅郷に新を賣るの女、越王句踐、會稽に敗らる、范蠡、西施を取りて吳王に獻す、吳王夫差、越の爲めに亡ぼさる、范蠡、西施を取りて以て江に沈む、越溪、西施が賤女の時、衣を洗ひし溪の名、浣紗伴、西施が賤女の時、共に衣を

洗ひし件けんの女を謂ふ、效響、西施、家に在り、一日心を痛めて、眉を蹙む、其の里の醜女輩之を見て、此の如くなれば、是美なるべしと、各の家に歸り、俄かに眉を仰へ、眉を蹙む、見る者驚いて以て逃れ去ると「莊子外篇」に在り、世に之を東施效響と謂ふ、

【大意】 艶色は天下等しく重んずる所、西施の如き艶色の女は寧ろ久しく微賤に處るものぞ、朝に越溪に於て衣を洗ひし女なりしも、暮には吳王の寵姫と爲る、賤しき日は他の衆女と殊ならず、一度王妃と爲るや、方に其の稀なる艶色なることを悟る、昔は人の爲め薪を賣りし身分も、今日は侍女をして己が面に脂粉を傅けしむ、のみならず、羅衣即ち薄絹の衣も自分で著けること無し、吳王の寵愛は其の驕態を益すばかりなり、吳王の愛憐することは是非を超越してあるなり、當時越溪に在りて共に洗紗せし女は、今日は西施と車を同じうして歸ること能はず、持して謝して言ふ、鄰家の女子等よ、妾が鬢に效ふと雖も、それは到底希ふべきにあらず、

【餘論】 此の篇、表面は西施の美を詠するが如きも、側面は他に寄託するものあるが如し、莊子が效響説、表面西施に在りて内面は他に在ること學者の皆認むる所、詩も亦寄託する所無くんば、亦言ふに足らず、趙松谷曰く、賤日豈殊衆の十字、古今皆佳句と稱す、然れども愚は意ふ、是れ君寵益驕態の十字、尤も工なりと、四言の義、俱に慨詞に屬す、然れども出すに冲和の筆を以てす、遂に覺えず、温風平耳に入るの音を爲すを、誠に風人の旨に合ふ有哉、漁洋唐賢三昧之を收む、黃香石評して託意深遠と曰ふ、良に我が心を獲たり、松谷の君憐の二句を佳とするは、余は不賛成なり、賤日の句

の佳に及かず、

李陵詠

李陵の詠

漢家李將軍、三代將門子、  
結髮有奇策、少年成壯士、  
長驅塞上兒、深入單于壘、  
旌旗列相向、簫鼓悲何已、  
日暮沙漠陲、戰聲煙塵裏、  
將令驕虜滅、豈獨名王侍、  
既失大軍援、遂嬰穹廬恥、  
少小蒙漢恩、何堪坐思此、  
深衷欲有報、投軀未能死、  
引領望子卿、非君誰相理、

漢家の李將軍、三代將門の子、  
結髮して奇策あり、少年にして壯士と成る、  
長驅す塞上の兒、深入す單于の壘、  
旌旗列なりて相向ひ、簫鼓悲しんで何ぞ已まん、  
日暮沙漠の陲、戰聲煙塵の裏、  
將に驕虜を滅さしめんとす、豈獨名王に侍するのみならん、  
既に大軍の援を失ひ、遂に穹廬の恥に嬰る、  
少小より漢恩を蒙る、何ぞ堪へん坐して此を思ふに、  
深衷報するあらんと欲す、軀を投じて未だ死する能はず、  
領を引きて子卿を望む、君にあらずんば誰か相理せん、

【注解】李陵、字は少卿、李廣が孫、李當戸の子なり、建寧と爲り、諸騎を監督す、善射にして士卒を愛す、三代、李廣、李當戸、李陵、『漢書』李廣傳贊に、三代之將、道家所忌、自廣至陵、遂亡其宗とあり、結髮、『漢書』に、施繡結髮、事師數十年、師古の注に、言從結髮爲章明とあり、少年、年二十前後にて三十前後の壯士の事を成す、乃ち武帝の時に八百騎に將として匈奴の地に入る、長驅、『史記』に、輕卒銳兵、長驅至國とあり、單于、匈奴天子の號を謂ふ、名王、匈奴王を指す、穹廬、氈帳なり、其の上穹廬、故に名く、『漢書』に、匈奴父子、同穹廬臥とあり、投軀、『北史』に投軀萬死之地、以應一旦之功とあり、子卿、『漢書』に、蘇武字は子卿、杜陵の人、武帝の時、中郎將と爲り、匈奴に使す、單于捕へて降らんことを動む、蘇武肯かす、是に於て無を牧はず、十九年間、漢節を持して、變改せず、後、漢と匈奴と和睦し、蘇武は漢に歸るを得、李陵は遂に歸るを許さざるなり

【大意】漢家の李將軍は、三代武人の子なり、結髮の時已に奇策を有す、少年にして壯士の業を成す、乃ち塞上に長驅するの男兒と爲る、兵を率ゐて深く單于の域に入る、漢の天子の旌旗を翻して陣列相向ひ、漢の簫鼓を鳴らす聲悲壯なり、日暮に及ぶまで沙漠の間に戦ひ、煙塵漠漠の裏に馳驅し、志は驍勇を絶滅せんと欲す、豈獨に名の高き王に侍するのみならん、如何にせん漢の大軍の援助來る無く、遂に匈奴に降參するの恥に嬰る、而かも思ふ、少小より漢恩を蒙り、今降參の身に成りて之を思へば、其れ堪ふる所にあらず、深衷必ず漢の爲め報するあらんと欲す、軀を此の處に投じ未だ死する能はず、今日は領を引ばして子卿が漢に歸るを望む、且言ふ君にあらざれば、陵が心事を相理して呉れるもの無し、

【餘論】此の篇、右丞年十九の作なりと、深く李陵が年少にして、彼の事ありしに感激せしものならん、李陵の降伏するや、必ずしも怯懦にあらざることは、陵と蘇武との唱和の詩に見ても明白なり、陵若し眞に惜むべきものなれば、蘇武は決して彼に同情多き詩は作らざるものなり、右丞少年にして彼が情を知り、此の詠を成せしものと思ふ、但し本集第一卷に八句の從軍行詩あり、其の五六の句に日暮沙漠陲、戰聲煙塵裏とあり、今の句と全く同じ、同句を甲乙の二詩に用ふるは、大家の技倆として怪しむべきに似たるも、作者、偶然に此に至りしものならん、顧可久の評に、能道陵意中事、雅正雄渾頓挫とあり、

燕子龕禪師

燕子龕禪師

山中燕子龕、路劇羊腸惡、  
裂地競盤屈、插天多峭崿、  
瀑泉吼而噴、惟石看欲落、  
伯禹訪未知、五丁愁不鑿、  
上人無生緣、生長居紫閣、  
六時自撻磬、一飲尙帶素、

山中の燕子龕、路は羊腸の惡よりも劇し、  
地を裂きて盤屈を競ひ、天を挿んで峭崿多し、  
瀑泉吼えて噴き、惟石看て落ちんと欲す、  
伯禹訪うて未だ知らず、五丁愁へて鑿せず、  
上人無生の緣、生長して紫閣に居り、  
六時自撻磬を撻ち、一飲尙素を帯にす、

種田燒白雲。斫漆響丹壑。  
 行隨拾栗猿。歸對巢松鶴。  
 時許山神請。偶逢洞仙博。  
 救世多慈悲。卽心無行作。  
 周商倦積阻。蜀物多淹泊。  
 巖腹乍旁穿。澗唇時外拓。  
 橋因倒樹架。柵值垂藤縛。  
 鳥道悉已平。龍宮爲之涸。  
 跳波誰揭厲。絕壁免捫摸。  
 山木日陰陰。結跏歸舊林。  
 一向石門裏。任君春艸深。

田を種ゑて白雲を燒き、漆を斫りて丹壑に響く、  
 行いて栗を拾ふ猿に随ひ、歸りて松に巢ふ鶴に對す、  
 時に許す山神の請、偶また逢ふ洞仙の博、  
 救世慈悲多く、卽心無行作、  
 周商積阻に倦み、蜀物淹泊多し、  
 巖腹乍ら旁穿、澗唇時に外拓、  
 橋は倒樹に因りて架し、柵は垂藤に値うて縛す、  
 鳥道悉く已に平か、龍宮之が爲めに涸る、  
 跳波誰か揭厲せん、絶壁捫摸を免かる、  
 山木日に陰陰、結跏舊林に歸る、  
 一たび石門の裏に向ひ、君が春艸の深きに任す、

【注解】燕子窩、山名なり、連理水上に在り、山城門は其の東に在り、飛霞泉は其の西に在りと、唐羅山宮園に出づ、羊腸、路の  
 盤紆曲屈、羊腸に較ぶれば更に惡し、峭崿、孫綽が「天台山賦」に、蹕二峭崿之嵒巖」とあり、峭崿なる峻崖を謂ふ、伯禹、禹王なり、

五丁、山を移し、萬鈞を舉ぐる、五人の力士なり、上人、人間以上に徳を有する人、無生緣、涅槃の眞理は生滅無ければ無生と謂ふ、  
 而かも縁に因りて生滅あり、上人は縁に因りて生長したるなり、紫閣、「太平廣記」に、終南山の紫閣峯、長安城を去る七十里とあり、  
 六時、一日一夜を六時に分つ、日初分時、日中分時、日後分時、夜初分時、夜中分時、夜後分時なり、一飲、二食一飲は佛家の通規、  
 帶案、鹿服を謂ふ、種田、種福田の時、佛徒の修道を種福田と謂ふ、又齊民要術に、凡そ荒山澤田を開く、皆、七月、草を爰り、乾  
 くときは放火、春に至りて開墾す、其の林木大なるものを割殺す、棄死れて腐がす、復ち耕種に任ふ、三歲後、根枯れ墾朽つ、火を  
 以て之を燒く、新漆、「古今注」に、漆樹は剛斧を以て其の皮を斫り、開きて竹管を以て之を承く、汁、管中に滴り、卽ち漆と成る、山神  
 請、「法苑珠林」に、廬山の曇邕和尚は關中の人、長八尺、雄武、人に過ぐ、惠遠法師に師事して、苦學精修し、疲苦を憚らず、山  
 西に於て、別に茅宇を設け、弟子曇果と、思を禪門に澄ましむ、曇果一夜夢に山神來りて五戒を請求するあり、果曰く吾師此に在り  
 往いて請受すべし、後少時にして見見る一人單袷衣を著け、風姿綽雅、從者三十人、來りて五戒を請受するを、邕、果が光の夢を以  
 て、是れ山神なるを知り、是に於て説法受戒す、神聖するに（願は布施なり）外國の七筋を以てし、禮拜辭別、徒息に見えずとあり  
 洞仙博、曹植の詩に、仙人覆六箸、對博太山隅、博は局戲の遊なり、卽心、此の心この儘と云ふ義、無行作、無行無作を謂ふ、自然  
 と道に合したるは其の痕跡無きを謂ふ、有行有作の反對なり、積阻、積累險阻と成語す、周の商人も積累險阻の爲め至らざるなり、  
 淹泊、久しく止まるなり、蜀の物貨も久しく止まると言ふは、前の五丁の文字に照應する爲めなり、鳥道、凡そ山路の高峻險絶なる  
 もの、之を鳥道と謂ふ、險處に僅かに飛鳥の道あるを謂ふ、爲之涸、山の險阻を開き、其の土の舍る所は海水なり、海水が埋まれば  
 龍宮は涸れざるを得ず、揭厲、「爾雅」に、深きは則ち厲り、淺きは則ち揭ぐとあり、捫摸、藤や藟や葛の枝を「ツカミヒク」なり、  
 結跏、佛徒の坐する法、左右の足を重ねて坐す、蓋し胡坐「アゲラ」にはあらず、

【題義】燕子窩禪師と題するは、燕子窩に住したる禪師なるが故に、右丞が是の題を設けしならん、  
 燕子窩禪師なる名は僧史に見えざるなり、然れば眞の名は知るを得ず、

【大意】燕子龜は山中最も深き處に在りて、此に至るには路險阻にして羊腸よりも惡し、其の下地の方は何年に裂けしや知らず盤扇を翫うて險なり、其の上天の方は何神が插みしやを知らず、峭崿を争うて多し、而して瀑泉の堂堂と落つる聲は吼ゆるが如く、瀑布に旁うてある怪石は落下せんとする形を爲す、古の伯禹は善く地理を治めし人、而かも此の處は知らざる所なり、蜀の險道を開拓せし五丁も、此の危険の處は自分の身を愁ふるが故に鑿開せず、然るに禪師上人は無生の縁を以て此の土に生長し、生長して以て紫閣峯に住し、晝夜六時に自ら磬を撞つて修行し、口には僅かなる飲物を取り、身には惡末なる袈裟を著け、福田を畔す爲めに惡木を燒き、惡雲を掃ひ、漆樹を斫るの聲は丹壑に響く、行くには栗を拾ふ所の猿と共にし、歸るには松に巢ふ鶴と俱にす、時ありては山神の請求に應じて戒法を授け、偶には仙人と同じく碁を圍むの戲も爲し、而かも自己一身の爲にはあらず、救世の慈悲心を多く抱き、即心にして無行無作の業を積む、是に於て周商も積阻に倦みし處、蜀物も淹泊多き處、巖腹を乍ちに旁穿し、潤唇も時ありて別に新しき處に拓き、橋は倒樹を利用して架設し、柵は垂藤を是亦利用して便宜にし、飛鳥より他の物は通ずる能はざる險道を始めて能く平夷に爲す、之が爲めに龍宮の水は涸れんとするかと思ふ、橋の無き時は跳波を渉るに皆揭厲したり、柵の無き時は絶壁を攀づるに皆捫摸したり、然るに上人の慈悲業に因りて今は之を免る、然るのみならず、山木は日日陰影を深うし、上人は舊林に歸りて結廬せんとす、上人は一たび石門の裏に向へば、坐禪三昧なれば、春神の深きに任さんのみ、

【餘論】此の篇、起句より以下捫摸までの三十句は入聲一韻、山木以下の二十字、平聲一韻、奇句あり、雄句あり、藍田石門精舍詩と多く相通らざるを覺ゆ、

羽林騎閨人

羽林騎の閨人

秋月臨高城。城中管絃思。  
離人堂上愁。稚子階前戲。  
出門復映戶。望望青絲騎。  
行人過欲盡。狂夫終不至。  
左右寂無言。相看共垂泪。

【注解】羽林騎、此の名は漢の武帝太初元年に置く所、「唐書百官志」を案するに、左右羽林軍あり、後人、天子の禁兵を謂つて、昔之を羽林と謂ふ、日本今日の近衛兵の事なり、離人は家を守る閨人なり、青絲騎、青色の絲にて羽林騎たるの符と爲す、晉の劉琨の詩に、未見青絲騎、徒勞紅粉妝とあり、狂夫、閨人が其の夫婿を指す、

【題義】婦女が男子に對し、愁情を敘ぶるを閨怨と曰ふ、此の詩は軍人の妻の閨怨と謂ふ意味なり、



【大意】秋月皓皓と高城の上に臨む、城中には處處に管絃起りて我が思に入る、夫と離れて家に在る人は唯獨り愁に沈む、稚子は無心階前に游戲する、堂を下り門を出でて見れば、月影は復戸に映じ來る、此の處を過ぎ去る青絲騎あり、若しや此の中に我夫が居るやと注意すれども、曾て其の人は無し、皆過ぎ盡くす、我が家の狂夫は何處を彷徨して居るにや、終に至らず、侍女共は離人の愁狀見るに忍びず、皆無言にして互に相看て泪を垂るるのみなり、

【餘論】閨人の情態を寫し出し、之を六朝人に比較して見るに、別に新意あるにあらず、但狂夫の文字を使用したる點は、閨怨詩に於て絶妙と稱せらるる王昌齡なぞの夢想せざる所、夢想せざるのみならず、王昌齡は言ふを欲せざる語なり、女の妬心より發する語、良人の字面より強烈を覺ゆ、劉禹錫の日出三竿春霧消、江頭蜀客繫蘭橈、欲寄狂夫書一紙、家住成都萬里橋と、意を同じうす、顧可久評して緬思之意深至と、當れりと謂ふべし、

冬夜書懷

冬夜の書懷

冬宵寒且永夜漏宮中發、  
草白靄繁霜木衰澄清月、

冬宵寒くして且永く、夜漏宮中に發す、  
草白うして繁霜靄たり、木衰へて清月澄む、

麗服映頰顏朱燈照華髮、

麗服頰顏に映じ、朱燈華髮を照らす、

漢家方尙少顧影慚朝謁、

漢家方に少を尙ぶ、影を顧みて朝謁を慚づ、

【注解】夜漏、漏刻の法、孔竇を漏と爲し、浮箭を刻と爲し、水の高下を見、以て昏明の候を定む、故に漏刻と曰ふ、晝に在りて之を晝漏と謂ひ、夜に入りては之を夜漏と謂ふ、是の漏刻は聲を發せず、唯時刻を計るのみなり、後人々に小鐘を施し其の刻毎に鳴る、之を漏鼓と謂ふ、今乃ち發と曰ふ、漏鼓に屬す、顧の字は盛人を意味す、繁霜が足さ意味なり、「詩經」に正月繁霜とあり、朱燈、齊の鮑照の詩に、朱燈滅朱顏等とあり、華髮は白髮なり、尙少、「漢武故事」は、武帝一日郎署に至り、一老郎の顴眉皓髮なるを見る、問ふ何れの時に郎と爲るや、何ぞ其れ老いたる、對へて曰く、臣姓は顧、名は朝、文帝の時、郎と爲る、文帝、文を好み、而して臣、武を好む、景帝、老を好んで、而して臣獨り少し、陛下、少を好んで、而して臣は已に老ゆ、是を以て三葉不遇なり、武帝其の言に感じ、擢んで會稽都尉と爲す、

【大意】冬宵は寒うして且永く、二更三更と漏聲の屢は宮中に發するを聴く、宮庭を見れば、草の白く見ゆるは是れ繁霜の靄たるなり、天上を仰げば、清月澄んで木の衰へたるを照らす、宮中の故に麗服を着用して居る身も、哀しい哉、老人の頰顏に映じ、朱色の燈火は老人の白髮を照らす、漢家の天子は少年を尙ぶ、老人は自分の影を顧みて明朝の謁見を慚づとなり、

【餘論】此の篇は、單に衰老を歎嗟するにあらず、側面に頰顏の如く不遇なるものあるを示すなり、詩は顧可久の雅正と評するに盡く、

早朝

皎潔明星高蒼茫遠天曙  
槐霧鬱不開城鴉鳴稍去  
始聞高閣聲莫辨更衣處  
銀燭已成行金門儼驄馭

早朝

皎潔として明星高く、蒼茫として遠天曙く、  
槐霧鬱として開かず、城鴉鳴きて稍去る、  
始めて高閣の聲を聞く、更衣の處を辨すること莫し、  
銀燭已に行を成し、金門驄馭儼たり、

【注解】明星は即ち太白星、「爾雅」に明星謂之啓明とあり、注に、晨出東方高三舍、命曰明星とあり、蒼茫、「ホシヤリ」として大なる形容、槐霧、露の何題の時に、城霞且晃朗、槐霧鬱氣重とあり、更衣、朝賀して衣服を更ふる室の名なり、王充の「論衡」に、更衣之室、可謂臭矣とあり、銀燭、南北朝の顧野王が舞影賦に、燭金波兮耀戸、列銀燭兮蘭房とあり、金門、金馬門の略稱、漢の武帝、學士をして金馬門に待詔せしめ、顧問に備ふ、漢の未央宮の前、銅馬あり、故に金馬門と曰ふ、驄馭、驄從馭なり、大官の前導從騎を皆驄馭と曰ふ、

【題義】早朝、宮禁の景色を敘するが主眼なり、

【大意】皎潔たる明星は天に在りて高く、蒼茫たる遠天は漸く曙色を呈す、槐樹に籠もる霧は散開せざるが爲めに暗く、城上を離るる鴉は鳴いて次第に去る、此の時始めて高閣に人聲の起るを聞く、而かも更衣の室を明白に辨する能はず、既にして銀燭の雁行を成すを認む、乃ち知る高官が朝賀の爲め

驄馭を儼にして參内することを、

【餘論】顧可久本に早朝二首と題し、是の詩と別に一首あり、曰く柳暗百花明、春深五鳳城、城鳥睥睨曉、宮井轆轤聲、方朔金門侍、班姬玉輦迎、仍聞遣方士、東海訪蓬瀛、譯下の如し、柳暗うして百花明か、春は深し五鳳城、城鳥睥睨の曉、宮井轆轤の聲、方朔金門に侍し、班姬玉輦を迎ふ、仍聞く方士を遣りて、東海に蓬瀛を訪はしむ、顧評して曰く、漢の武帝、仙を好むの事、早朝に因りて事を使ひ、玄宗が政事を廢して荒侈に耽るを隱諷するの意、此賈至に和する詩の意と調尤も高古俊偉、和詩は拘束して、人に遷就するを免れず、此則ち自家の意思縱放乃ち爾り、正大雄渾彰麗なり、余が講本は趙殿成注なれば、研究に志あるの士は、顧趙の二本對照せられんことを望む、

寓言二首

朱紱誰家子無乃金張孫  
驪駒從白馬出入銅龍門  
問爾何功德多承明主恩  
鬪雞平樂館射雉上林園

寓言二首

朱紱誰が家の子ぞ、乃金張が孫なる無からんや、  
驪駒白馬に従ひ、出入す銅龍門  
問ふ爾何の功德ぞ、多く明主の恩を承く、  
鬪雞を鬪はす平樂館、雉を射る上林園、

曲陌車騎盛。高堂珠翠繁。  
曲陌車騎盛ん、高堂珠翠繁し。  
奈何軒冕貴。不與布衣言。  
奈何ぞ軒冕の貴き、布衣と言はず。

【注解】朱、朱は正赤色なり、絨は絨、又絨冕、印綬を帯び冠を著けるなり、絨は黻と同音同義の字なり、金張は前既に辨ぜり、驪駒は純黒色の馬を曰ふ、漢の古詩に白馬從驪駒とあり、銅龍門、門樓の上に銅龍あり、故に以て名とす、漏器にも銅龍あり、噴水器にも銅龍あり、門に於ては裝飾なり、何功徳、魏の龐參の詩に問我何功徳、三入承明廡とあり、平樂館、漢書武帝の元封六年の夏、京師の民、角抵を上林平樂館に觀るとあり、娛樂の爲め會する處ならん、上林園、普通に上林苑と書す、園の爲め園とせしなり、『三輔共園』に、上林苑、方三百里、苑中に百獸を養ひ、天子秋冬、射獵之を取るとあり、曲陌、曲は屈曲、陌は街陌、市中の九區を曰ふ、軒冕、卿大夫の車服なり、布衣、庶人を謂ふ、漢の桓寬の『鹽鐵論』に、古は庶人耄老にして後絲を衣る、其の餘は則ち僅かに麻桑へ、故に布衣と曰ふとあり、

【題義】寓言とは寄託する所あるの言なり、『史記』に、莊周、書を著はす十餘萬言、大抵寓言なり、字の表面に顯はるる所は、其の裏面に深き意味を寓するの言、是を寓言と稱するなり、是の故に解すべく、又解すべからざるものあり、此の詩は甚だ解し易し、

【大意】朱絨を以て身を裝ふ公子然たる人は果して誰が家の子ぞ、察するに是れ高貴と姻縁ある金張が家の孫ならん、自身は驪駒に騎りて、而して白馬に乗る大官に従ひ、意氣揚揚として銅龍門に入する、之に何の功徳を有して然るや、明主の恩を承くる多きやと問ふ、察するに鬪雞の遊伎に巧な

るを以て平樂館に陪し、雉を射るの弓術に妙なるを以て上林苑に従ふ、市街の南北に車騎盛んなる、高堂の上下に珠翠即ち美服の人繁き、皆是彼等の徒なり、奈何に軒冕は貴きぞ、市井の平民輩とは言語を交へざるや、

君家御溝上垂柳夾朱門。  
君が家は御溝の上、垂柳朱門を夾む、  
列鼎會中貴。鳴珂朝至尊。  
鼎を列ねて中貴を會し、珂を鳴らして至尊に朝す、  
生死在入議窮達由一言。  
生死入議に在り、窮達一言に由る、  
須識苦寒士莫矜狐白溫。  
須らく識るべし苦寒の士、狐白の溫かなるに矜ること莫

【注解】列鼎、劉向の『說苑』に、累茵而坐、列鼎而食とあり、珍産佳肴を列ねて食ふなり、中貴、中貴人と曰ふ、一種の官名なり、内臣の貴幸なる者、『漢書李廣傳』に、上使中貴人從廣、勅習兵、擊匈奴とあり、其の後専ら宦官を以て中貴人と爲す、鳴珂、珂は玉に夾ける石、白珊瑚なり、馬勒、即ち珂にて飾る白色の勒なり、唐代、官一品以下は九子、四品は七子、五品は五子とあり、馬行即ち珂が響くなり、八議、周代の刑法に八議の法あり、一に曰く議親之、二に議故之、三に議賢之、四に議能之、五に議功之、六に議貴之、七に議勤之、八に議賢之、狐白溫、狐腋の白毛、以て裘と爲す、富貴の人にあらすんば衣る能はず、

【大意】君が家は天子と鄰して御溝の上に在り、門柳は垂垂として朱門の左右を夾む、燕會を設けて

中貴人を招き、天下の珍味を陳列して食ふ、或は至尊に朝賀するときには玉珂を鳴らして貴威を示す、民衆が若し此等の状を批評するならば生死の分岐點に立たざるべからず、窮するも達するも一言譽むると譏るより定まる、されど君等は少しく寒に衣なき士人の苦をも察し、狐白の裘を着けて居る身分の温かきに矜ることを止め玉へ、

【餘論】此の篇二首共に無能なる子弟が、父兄の要路に在るが爲め、各の其の放蕩を盡くして、日夜單に游戲に耽るを諷誡したるものなり、奈何軒冕貴、不與布衣言、此の十字の如きは昭和の今日にも見る所なり、特に官僚の徒に於て多しとす、然りと雖も余は一概に之を論せざるものなり、如何に平等博愛を主とする者も、馬夫や車丁、乃至乞丐の徒と友人の如く之と談話を交ふることは斷じて能はざる所、階級上下の分、自然の致す所、釋迦孔子も亦如何ともすべからざるべし、是の故に人は馬夫車丁と爲らんより、大臣大將と爲るべきなり、虚谷の『瀛奎律髓』に、此の後首を載せて虚象の作とし、八議を片議と改む、而して評して曰く古樂府の意あり、格調甚高と、清の紀曉嵐曰く、中の四句對偶と雖も、然も終に是れ俳偶の古體、律格にあらざるなり、語淺く局促る、虚谷以て高格と爲すは尤も非と、余案するに「全唐詩」王維集に此二首を載せ、虚象集に此の後首を載す、而して維には八議とあり、象には片議とあり、今其の是非を定むるは容易ならず、但詩體として見れば、虚谷の之を律格とするは其の誤り明白にして、紀の古格と稱するは正當なり、詩品に於て虚白は格調甚高と謂ひ、曉嵐は語淺局促と謂ふ、是の評は虚白是にして、曉嵐は非なり、顧可久は曰く、雄渾遒古と、方と顧との二家の讀する所を、曉嵐獨り譏る、彼は虚象なるが故に譏りたるなり、若し王右丞なりと知らば、何ぞ此の評あらんや、我邦に刊誤を刊誤したる學者ありし、是に於て乎、彼は我に學ばざるべからざる所あり、

雜詩

雜詩

朝因折楊柳相見洛城隅。朝に楊柳を折るに因つて、相見る洛城の隅、  
楚國無如妾秦家自有夫。楚國妾に如くは無し、秦家自から夫あり、  
對人傳玉腕映竹解羅襦。人に對して玉腕を傳へ、竹に映じて羅襦を解く、  
人見東方騎皆言夫婿殊。人は東方の騎を見て、皆言ふ夫婿殊なりと、  
持謝金吾子煩君提玉壺。持謝す金吾の子、君を煩はして玉壺を提げしめん、

【注解】楚國、楚妃は楚の莊王の夫人、秦家、秦家に經數なる美人あり、玉腕、梁の簡文帝の詩に、雙文生玉腕、香汗浸紅紗とあり、羅襦は薄くして短き「ハダギ」を謂ふ、齊の謝朓の詩に、輕歌念綺帶、含笑解羅襦とあり、東方騎、漢の古詩に東方千餘騎とあり、夫婿殊、漢の古詩に皆言夫婿殊とあり、金吾、執金吾は官名、日本今日の警視の如き役なり、

【題義】此の詩は何を歌ふと定め難きもの、皆題して雜詩と曰ふ、「古樂府」に折楊柳と題する辭あり、又陌上桑と題する辭あり、今は孰れに由るとも定めがたければ、雜詩と題する所以なり、要は古樂府の詞を節要して、右丞自ら詠じ、其の眞を守るの意を寓し、朝に源氏と爲り、夕に平氏と爲る徒輩を嘲笑したるものなり、

【大意】此の詩意を説明するには、此の詩の因つて來る根原を知らざれば能はず、根原を知れば、此の詩を説くの要なし、漢の陌上桑に曰く、日は出づ東南の隅、我が秦氏の樓を照らす、秦氏好女あり、自ら名けて羅敷と爲す、羅敷善く蠶桑す、桑を城南の隅に採る、青絲を籠係と爲し、柱枝を籠釣と爲す、頭上は倭墮髻、耳中は明月珠、細綺を下裙と爲し、紫綺を上襦と爲す、行者羅敷を見る、擔を下りて髻鬢を持る、少年羅敷を見る、帽を脱して幘頭に著く、哂す者は其の玳を忘れ、鋤ふ者は其の鋤を忘る、來歸相怒怨し、但坐ろに羅敷を觀る(一)、使君南より來る、五馬立つて踟躕す、使君吏を遣りて往かしめ、問ふ是れ誰が家の姝ぞ、秦氏好女あり、自から名けて羅敷と爲す、羅敷年幾何ぞ、二十尙ほ足らず、十五頗る餘あり、使君羅敷に謝す、寧ろ共に載すべきや不や、羅敷前んで辭を致す、使君一に何ぞ思なる、使君自から婦あり、羅敷自から夫あり(二)、東方千餘騎、夫婿上頭に居る、何を用つて夫婿を識る、白馬驪駒を従ふ、青絲馬尾に繫ぐ、黃金馬頭に絡ふ、腰中鹿盧の劍、值千萬餘なるべし、十五府小吏、二十朝大夫、三十侍中郎、四十專ら城居、人と爲り潔白哲、鬢髮頗く鬢あり、

り、盈盈公府に歩す、冉冉府中に趨る、坐中數千人、皆言ふ夫婿殊なりと(三)、古趙の邯鄲に女子あり、秦を姓とし、羅敷を名とす、趙王の家令王仁の妻と爲る、桑を陌上に採る、趙王臺に登り、見て之を喜び、奪はんと欲す、羅敷、箏を彈じ、陌上桑を作り、以て自から夫あることを明かす、趙王乃ち止む、右丞乃ち此の婦の眞を敍し、以て我が志の堅きを見し、金吾の子弟をして、玉壺を提げしむる醜態を嘲けるなり、對人、映竹等の字義解すべく、又解すべからざるものなり、

獻始興公

始興公に獻す

寧棲野樹林寧飲澗水流  
不用食梁肉崎嶇見王侯  
鄙哉匹夫節布褐將白頭  
任智誠則短守仁固其優  
側聞大君子安問黨與讎

寧ろ野樹の林に棲まん、寧ろ澗水の流を飲まん、  
用ひず梁肉を食うて、崎嶇として王侯に見ゆるを  
鄙しい哉匹夫の節、布褐將に白頭ならんとす、  
智に任しては誠は則ち短く、仁を守りては固に其れ優なり、  
側に聞く大君子、安んぞ問はん黨と讎と、

所不賣公器。動爲蒼生謀。

公器を賣らざる所、動すれば蒼生の爲めに謀る。

賤子跪自陳。可爲帳下不。

賤子跪いて自陳す、帳下と爲す可けんや不や、

感激有公議。曲私非所求。

感激公議あり、曲私求むる所にあらず、

【注解】 寧は、彼物と此物と二物比較し、彼物よりは寧ろ此物を取らんとの義なり。梁肉、良米と美肉なり。「國語」に食は必ず梁肉、衣は必ず文繡とあり、「五言君傳」には僕妾餘梁肉とあり、崎嶇は山路の平穩ならざるが第一義にして、困難の喻は第二義とす、今は困難を謂ふ、大君子、漢の「董仲舒傳」に故不足稱於大君子之門也とあり、黨、晉の劉琨の時に、尙能隆二伯、安問黨與黨とあり、動を「ヤヤモスレバ」と訓したる本あり、今取らず、活動すればの意を取る、賤子、右丞自身を謙遜して言ふ、晉の應休璉の時に、避席席自陳、賤子實空虛とあり、帳下、今日謂ふ所の部下と同じ、「三國志」に、樂進以三膽烈、從太祖爲帳下吏とあり、

【題義】 唐書張九齡本傳に、九齡開元二十三年、金紫光祿大夫を加へられ、始興縣の伯に累封せらるるとあり、右丞は時に右拾遺に拜せらる、

【大意】 寧ろ野樹林に棲むも、我は綺閣に棲むを欲せず、寧ろ澗水の流を飲むも、玉壺の水を飲むを欲せず、食は命を支ふれば足る、何ぞ梁肉を食はんや、野人と談笑するも、崎嶇として王侯に謁せず、意氣や壯なるが如きも、要するに匹夫の節、鄙なる哉と言はざるを得ず、口に斯く放言するも、身には布褐襤褸冉冉と老境に通る、此の如き生活の愚なるを覺り、反して智に任ずるときは誠意が短と成る、唯仁を守るの道は固に勝優とする所なり、風説に聞く公は大君子に在すことを、大君子なるが故に黨

と歸との別なく一視同仁の徳を持ち玉ふ、高位に身を置くも職權を濫用する如きことを爲さず、一靜一動、皆蒼生の爲にのみ善謀し玉ふ、是に於てか賤子は恭跪して自陳仕る、大君子の部下と爲るを許し玉ふや不や、幸ひにして公議ありしことを感激す、賤子は曲私の事は毫も求むる所にあらず、唯我が誠を容れらるるに於て満足する、

【餘論】 右丞此の詩を以て九齡に獻す、九齡の容るる所と爲りて直ちに右拾遺の官に拜せらる、右丞の感激するに餘あり、世上徒らに自ら狷介と稱して、世と特に相反する者、此等の詩を二讀三讀すべきなり、

哭殷遙

殷遙を哭す

人生能幾何。畢竟歸無形。

人生能く幾何ぞ、畢竟無形に歸る、

念君等爲死。萬事傷人情。

念ふ君等しく死を爲す、萬事人情を傷ましむ、

慈母未及葬。一女纔十齡。

慈母未だ葬るに及ばず、一女纔かに十齡、

泱泱寒郊外。蕭條聞哭聲。

泱泱たる寒郊の外、蕭條として哭聲を聞く、

浮雲爲蒼茫。飛鳥不能鳴。

浮雲爲めに蒼茫、飛鳥鳴くこと能はず、

行人何寂寞。白日自淒清。  
憶昔君在時。問我學無生。  
勸君苦不早。令君無所成。  
故人各有贈。又不及生平。  
負爾非一途。痛哭返柴荆。

行人何ぞ寂寞、白日自から淒清、  
憶ふ昔君が在時、我に問うて無生を學ぶ、  
君に勸むる早からず、君をして成る所無からしむるを苦  
故人各の贈あり、又生平に及ばず、  
爾に負く一途にあらず、痛哭柴荆に返る、

しむ、

【注解】人生、昔の陶潜の詩、人生無幾何、爲樂常苦憂とあり、等爲死、死は貴賤平等なり、決計、漢の張衡が「西京賦」に、決計無疆とあり、決計は無際限の形容、無生は前に辨せり、生平は平生の倒用、平生と爲さば、第七の無生に害あり、負爾の爾は負の助語ならんと思へども、或は爾と讀むの通するを覺ゆ、柴荆、晉の謝靈運の詩に、促裝返柴荆とあり、柴門、荆扉なり、

【題義】殷遙は丹陽の人、天寶間、忠王府の倉曹參軍の官を以て終る、

【大意】人生は長短を説くも果して幾何ぞや、畢竟するに長も短も無形に歸るなり、念ふに君も亦常人と等しく今や死す、而して萬事人情を傷ましむ、慈母は逝いて未だ葬送せず、一女兒の遺るあるも纔かに十歳、君が棺を送るに決滯たる寒郊の外に向ふ、而して聞く所のものは蕭條たる哭聲のみ、天を仰げば浮雲は爲めに蒼茫たる色を現じ、飛鳥すら鳴かざるの凄狀なり、會葬の人も聲を發せず、故に寂寞たり、白日も光明かならず、故に淒清たり、我は記憶する君が在時に、君は問ふ無生の理とは

何ぞやと、其の間や甚だ善なれども、惜い哉其の期を後れて、無生の理を心得する所無くして逝きしを、故人は君を哭して、痛悼の言を贈るあるも、其の生平無生の理に君が心を寄せしことを知らず、我も痛む爾に負くこと一途にあらざりしを、今悔むも如何ともすべからず、痛哭して復柴荆に返る、  
【餘論】余常に漢の蔡琰の悲憤詩及び胡笳十八拍を讀み、悲慨眞に中心より湧くを覺ゆ、右丞の此の篇、蔡を學びしにはあらざるも、至情に出づるの語、人をして泣然たらしむるものあり、顧本に更に一絶を附す、送君返葬石樓山、松柏蒼蒼賓馭還、埋骨白雲長已矣、空餘流水向人間、趙本に儲光羲の同三王十三雜哭殷遙の五古を載す、今茲に採らず、

歎白髮

白髮を歎す

我年一何長。鬢髮日已白。  
俛仰天地間。能爲幾時客。  
悵惆故山雲。徘徊空日夕。  
何事與時人。東城復南陌。

我が年一に何ぞ長きや、鬢髮日に已に白し、  
俛仰天地の間、能く幾時の客と爲る、  
悵惆す故山の雲、徘徊空しく日夕、  
何事ぞ時人と、東城復南陌、

【大意】我年などは考へて居らざりしも、鬢髮の白きを見て、始めて老境に逼りしを覺る、天地の間

309  
65

王右丞集卷五

二〇四

を俛仰して、此の世上の客と爲る尙幾年ぞ、帳惆として故山の雲を望み、無爲に徘徊して今日も暮れぬ、我は我の事を務むれば足る、然るに何事ぞや、時流の凡人共と、或は東城或は南陌と奔走する、

王右丞集卷五終



終